

若い世代の孤独と独立への勝ち筋

瀧口道成

研究の現場と制度設計の両側に身を置いてきた経験から、いま自分が組み立てたいのは「個が自立するための設計図」である。ラボで芽吹いた小さな仮説が、組織や制度の壁を越えて社会の力に変わるには、発想だけでは届かない。資金、時間、仲間、そして静かな思索の余白——それらをどう束ねるかが勝負どころだ。

各地で若い研究者と対話するたびに、共通の不安に出会う。博士課程を修了し、ポストクを経て、任期付きのポストに就く。そのどこかで「自分は一人前になれるのか」という問いが胸に重く居座る。業績を焦って空回りする気配も見える。だからこそ、制度の側から独立の足場を支える必要があると思うようになった。

そこで構想したのが、早い段階で節目の点検を入れつつ、数年から10年規模のアークで個の独立を後押しする支援のかたちである。年次の点取り合戦ではなく、「この人が自分の旗で歩き出せる条件は何か」を中心に据える設計だ。三年目で中間のチェックを置き、七年前後を一つの目安に、到達すべきは“肩書き”ではなく“自律”とする。安定な線と、時間のかかる挑戦的な線とを併走させる——そんな研究の作法を制度が守るべきだと考えている。

鍵は孤独である。孤独は寂しさとは違う。自分の内側に静けさを確保し、ひとつの問いと長く向き合うための空間だ。研究者はそこに耐える必要があるし、同時に時期がくれば人に会い、素直に学び、対話に開く柔らかさも要る。「孤独に耐えること」と「人と交わること」は対立しない。両輪で走らせる。そのためには、自分で自分に“上限（キャップ）”をかぶせないことだ。

大切にしてきた価値は“個性（Individuality）”と“自立（Independence）”である。アメリカで学んだのは、複雑さを積み上げるより、単純で強い論拠を磨く力だ。シンプルな実験やミニマルな理論は、本当に説得力を持つ。フィールドをまたぎ、居場所を変え、身軽に動く決断も恐れぬ。職を失う恐れが研究者の背中を固くする現実がある以上、大学と研究機関は、ある段階でパーマネントな足場に接続させる仕組みを設計し直すべきだ。年齢で門前払いを食う優秀な人材を、制度が見落としている事例は少なくない。

現場に戻れば、PIの肩には資金獲得、学生育成、研究推進が同時にのしかかる。時間は裂け、実験台から遠ざかり、心はすり減る。ここで効くのは、熟練の技術職員や専門秘書の力だ。彼らが要所を確実に押さえることで、学生は安心して跳べ、PIは本質の思索に潜れる。かつて技術職のネットワークづくりに関わったことがあるが、制度化は道半ばだ。教授—准教授—助教だけがトラックではない。技術・運営・解析の専門職を同格に据え、フラットに議論できる職制へと更新する必要がある。併せて、PIのための体系的なトレーニング——研究室経営、資金設計、チームビルディング——を標準装備にしたい。プロの世界へ「放り込む」のではなく、「送り出す」ための訓練である。

制度側の課題も直視する。希望だけを羅列しても前には進まない。予算の裏づけがない依頼が積み上がれば、現場は疲弊する。いま自分が最もエネルギーを割いているのは、感染症対策のメディカル・カウンターメジャー全体像——ワクチン、治療薬、診断——を同じ予算枠の中でどう最適化し、最短で失敗せず一歩前へ進む「勝ち筋」を描くか、という課題だ。必要なのは美辞麗句ではなく、工程表である。どれだけの資源で、どの順に、どこまで行けるのか。誰と組めば最大の前進がとれるのか。戦略からチーム設計までを書き切ることが、制度と現場をつなぐ唯一の橋になる。

情報発信は、華やかな広報よりも、結局は人から人への口コミが強い。草の根で届く言葉は、ある瞬間に臨界を越えて一気に広がる。SNSは使い方次第で友にも刃にもなるが、要は内容の芯である。「聞いて、はっとする人が出てくる」語り続けることだ。

ウッドデッキでは、若い世代が抱える不安を真正面から言語化し、「本当にやりたいこと」を掘り起こす場をつくりたい。孤独を引き受ける力を取り戻し、同時に支え合う仕組みを設計する。個の独立を守る長い支援の弧を描き、技術と運営のプロを対等に据え、無駄に豪華でないシンプルな勝ち筋を共有する。経済と制度の両面で、研究がちゃんと進む道を現場から描き直す。

新しい風は、外からではなく、静かな孤独と小さな設計図から吹きはじめる。ともに考え、ともに動きたい。これからの活動に、注目してほしい。



World Science Forum 2017 (Jordan)の開幕プレナリーセッションで講演